

式辞

冬が過ぎ、春がその出番を長らく待っていたかのように、寒気は一気にゆるんで、桜の花満開の心浮き立つ季節が巡って参りました。

本日ここに、平素より本校を愛し、限りない御支援をいただいております、本校ゆかりの御来賓の皆様、御臨席をたまわり、また、今日のこの佳き日を心から喜んでいらっしゃる保護者の皆様の御同席を得て、入学式を挙げていただけますことを、新入生とともに職員一同、厚く御礼申し上げます。

ただいま入学を許可いたしました全日制323名、定時制28名の新入生の皆さん、入学、誠におめでとうございます。保護者の皆様、お子様の御入学を心からお祝い申し上げます。

上田高校は、変則中学校・中学校支校等を経て、明治33年、西暦1900年に長野県上田中学校となって以来、今年119期の新入生となる皆さんを迎えた、歴史と伝統に輝く高等学校です。

さらに、本校は、文部科学省のスーパー・グローバル・ハイスクールや長野県二十一世紀型教育モデル校、県教育委員会のICTを活用した確かな学力育成事業などの指定を受けるとともに、国内外の教育機関と連携協定を締結するなど、長野県をリードする、先進的な教育を行っている高校としても知られているところです。

また、定時制は県内でも最大級の生徒数を擁していますが、一人一人の生徒の希望により沿う、丁寧できめ細やかな指導で東信地域に広く定評のあるところです。

さて、そのような本校に入学してきた新入生のみなさんに高校生活を始めるにあたってお話ししておきたいことがあります。

「星の王子様」で有名なサンテグジュペリの言葉に「良い船大工を育てるなら、広大な海への憧れを教えると良い」というものがあります。骨身を惜しまず、あらゆる工夫をこらしながら優れた船の建造に心からまい進する、本当に良い船大工を育てたいなら、船の仕組みや材料の良さの知識を教え込むよりも、まず、無尽の可能性が潜む、広大な海への憧れを教えることこそ一番の近道だということです。「良い船大工を育てるなら、広大な海への憧れを教えると良い」という言葉は、教師としての私の座右の銘ですが、この言葉は、若者が夢を抱くことの重要性を強調しています。

大人は「夢をもちなさい」と比較的簡単に若者に言いますが、率直に言って私は、夢を持つこと、あるいは多くの選択肢の中から「自分の夢はこれだ」と選びとることは難しいと思います。

あるイギリス人の友人は、一体、日本人は夢をもつことがあるのか、と私に聞いたことがあります。

ました。日本人は「将来何をしたいか」「どのように自分は成功したいか」をあまり考えません。若者のキャリア形成、進路決定において「夢をもつ」ことは重要ですが、儒教的な価値観が社会に浸透している東洋では、社会や集団の平和と秩序を維持することこそが長く大切なこととされました。個人は、誠実で勇気がある、真実のこもった行動が求められ、集団の長となるものは、その人が存在することで、いかに人々が対立することなくその場が和むかということが大切でした。主人は寡黙であっても、その安定感で家を治め、君主はその賢明なることで民を安心させる。つまり、日本の社会はこれまで若者に、伝統的には「将来何をしたいか」を問うのではなく「どのように生きていきたいか」「どのような人間になりたいか」を考えるよう求めてきたのです。

しかし昨今、この不確実性の時代にあって日本の若者は「将来何をしたいか、夢をもて」と言われて悩みます。「夢」は、意識的で自律的な思考ののちに論理的に構成されるものではなく、むしろ無意識のうちに自然に生じるように私には思われます。夢はどのように人の心に宿るのでしょうか。

夢は作られるものだから、目には見えないが一種の生成物です。生成物にはそれを形作る材料が必要です。

私は夢の材料となるものは「深い感動の記憶」だと思います。たとえば、芸術が表現する想像を絶する迫力、自然や文化財の圧倒的なすごさ、人の話を聞いた時の深い感銘、そういうものに人は心を動かされ感動します。また、人が何かに取り組む真剣な姿をみても心を動かされます。自ら身も心も一筋に何かをやり遂げたという体験からも深い感動がもたらされます。そうして得た「深い感動の記憶」の断片が心の中に蓄積していき、同じような断片とある日突然、不思議な化学反応を経て、「私は将来これをしてみたい」とあなたに言わしめる、夢の材料に成長するのです。

「夢」を皆さんの心に育むために、皆さんは、この3年間あるいは4年間に、広く世間や社会、または隣人に目をむけ、感動が残す物質を胸に多く蓄積してほしいと願います。

今年、上田高校の門をくぐった皆さんが、それぞれの夢を獲得し、その実現のための思考力と決断力を、社会と融和して秩序を愛する協働の精神を身につけられることを願って、式辞といたします。

平成30年4月5日

長野県上田高等学校長 廣田 昌彦